UNSCEAR2013年報告書（1/3）
報告書の目的【参考】

目的

- 原子力事故がもたらした放射線被ばくのレベル、及びその健康影響とリスク、さらにヒト以外の生物相への影響に関する知見の提示。
- 線量の推定値を提示し、UNSCEARがこれまで行ってきた科学的評価に照らして、日本国内に加え、近隣諸国での様々な集団の健康との関連を含めて議論。
- 将来実施される可能性のある追跡調査や研究のために、どのような知識が不足しているかを挙げる。

UNSCEAR2013年報告書（2/3）
公衆の被ばく線量評価に使われたデータ【参考】

利用した測定値等

1. 外部被ばく及び吸入による内部被ばく

① 地上で、及び航空機により測定された放射性物質の地表面の沈着密度

② 事故炉から放出された放射性物質の種類と量の推定値と大気中拡散シミュレーションにより推定された大気中及び地表面の放射性物質濃度

2. 経口摂取による内部被ばく

・食品及び飲料水中の放射性物質濃度

① １年目：市場に流通した食品及び飲料水中の放射性核種濃度の測定データ

② ２年目以降：土壌汚染濃度データからシミュレーションにより推定した食品中の放射性物質濃度。海産物については福島県沖海域での測定データ及び放射性核種拡散シミュレーションにより推定した海水中の放射性物質濃度。

・日本人の食品摂取量（国民健康・栄養調査）

UNSCEAR2013年報告書（3/3）公衆の健康影響についての評価【参考】

- 将来のがん統計において、事故による放射線被ばくに起因し得る有意な変化が見られるとは予測していない。

- 最も高い被ばくを受けたと推定される小児の集団について、甲状腺がんのリスクが理論上増加する可能性がある。そのため、今後、状況を綿密に追跡・評価する必要がある。

- 先天性異常/遺伝的影響は見られない。

出典：UNSCEAR「Fact sheet on UNSCEAR 2013 Report：Japanese（情報に基づく意思決定のための放射線に関する科学的情報の評価）」（https://www.unscear.org/docs/publications/2016/factsheet_jp_2016_web.pdf）より作成